

『アマテラスの誕生 -古代王権の源流を探る』

溝口睦子著／岩波書店

いまでは天照大神（アマテラスオオミカミ）は天皇家の皇祖神として伊勢神宮に祭られている。本書では、実はアマテラスは初めから皇祖神だったのではなく、アマテラスの前に別の皇祖神がいて、途中からアマテラスに代わった、ということを中心として語っている。本書は同著者の〔1〕に基づいている。本書を読む前には、私も皇祖神は最初からアマテラスだと思っていた。天武天皇が壬申の乱に勝利して天皇の地位につき、国家の基盤作りのため中央集権体制を強化する。そこで、天皇家の権威を高めるために古事記を編纂し、その中で女神アマテラスを皇祖神として、その孫ニギハヤヒの命を高天原から葦原の中つ国に降臨させ、その子孫が初代天皇の神武である。天皇家が天から命ぜられてこの国を治める絶対的な存在であることを示している。これが普通に知られているアマテラスであろう。しかし、本書ではアマテラスの前に皇祖神タカミムスヒという神がいたとして、皇祖神は途中でタカミムスヒからアマテラスに代わったとしている。

タカミムスヒ？初めて聞く神名である。いや、そういえば、古事記上巻の冒頭で2番目に現れる神が高御産巢日（タカミムスヒ）だった。それ以降、古事記ではタカミムスヒはしばらく現れず、忘れた頃にときどき出てくる。古事記を読むときに気をつけるとおもしろいと言われることに、古事記の中で少しだけ現れて、それ以降ほとんど出てこない神に注目することだという。少しだけ出てくるなら大して重要な神ではなさそうだから無理して古事記に載せる必要は無いと思うが、そうではないらしい。古事記の編者が消し去りたいと思っていても完全に消し去って無視することができない神がいるらしい。例えば、本書のタカミムスヒもそうであり、ニギハヤヒ、ヒルコ、ツクヨミもそうである。この三神に対する興味深く考察した本がある〔2〕、〔3〕、〔4〕。

アマテラスについては私の実家には「天照皇大神」の掛け軸があったが、子供の頃にはよくわからなかった。本書によると、明治政府は明治時代初期からアマテラスを利用して日本の国体の観念を国民に植え付ける思想教育を始めている。その影響で庶民の家にもアマテラスの掛け軸があったのだろう。私の父母は昭和初期の生まれであるが、小学校で歴代天皇の名前を覚えさせられた。「ジンム・スイゼイ・アンネイ・イトク・・・」。いまなら「ピカチュウ・カイリュウ・ヤドラン・

---

ピジョン・・・」といったら失礼か？子供たちはすぐに記憶してしまっただろう。天孫降臨神話によって天皇を権威付けることは中央集権による国家統一に関して大きな力を持ったであろうと想像される。

アマテラスは古事記の中で実に多くの神話の中に登場する。弟スサノヲと対決するウケイ神話、岩窟に閉じこもってしまう天岩屋神話、そして国譲りとそれに続く天孫降臨神話である。さて、ここが本書の核心部分であるが、著者は前者2つの神話と後者2つの神話は全く異質な神話体系であるという。これを「記紀神話の二元構造」としている。前者のウケイ神話ではアマテラスは弟をかばう心優しい神であり、また、岩屋に閉じこもってしまう気の弱い神であると著者は感じている。それに対して後者では絶対性・至高性を持つ神として国譲りを命じ、天孫降臨を命じている。これらは非常に対照的である。天岩屋前では八百万の神々が集まって歌い、アメノウズメの舞に喜ぶ。八百万の神々というのは神道的というかヤマト的である。絶対神というのはこれになじまない。著者は前者をイザナキ・イザナミ系神話といい、これは日本土着の四世紀以前からの神話体系であるという。それは縄文・弥生時代から続く神話で我々にも親しみのあるイザナキ・イザナミ、オオクニヌシ、スサノヲ、アマテラスなどの豊かな神話を含む。これらは南方系の神話であるらしい。一方、後者の天孫降臨神話は五世紀に北方ユーラシアから導入されたとしている。

五世紀に東アジアは激しい動乱の時代にあり、どの国も国力を高めることが重要な課題であった。そのため、統一王権を権威付け、人心をまとめる思想的武器として天孫降臨神話が必要であった。それは当時の流行のようになり日本にも導入された。そして、そのときには至高神はアマテラスではなく、タカミムスヒであった。その頃、アマテラスは地方の神であり、伊勢神宮も地方の神社であった。タカミムスヒは天皇に直属する勢力が信奉した神であった。

そのタカミムスヒが途中からアマテラスに代わった。タカミムスヒは五～七世紀の皇祖神でアマテラスは八世紀以降の皇祖神である。皇祖神を交代させたのは天武天皇である。天武天皇は当時大陸からの文化が日本に押し寄せるのに対抗してヤマト的なものを重要視していた。タカミムスヒが北方から由来して、特定の

---

氏が信奉した派閥色の強い神であったのに対抗して、すべての人々に古くからなじみの深いアマテラスを中心として挙国一致体制を整えようとしたのであろう。天武天皇の業績が〔4〕に詳述されていて勉強になる。

いまから考えてみると、日本の最高神がアマテラスでよかったと私は思う。伊勢詣での人気もアマテラスだからこそであろう。本書の後書きで著者は次のように述べている。

歴史の変化に翻弄されたアマテラスには今度こそ誕生した  
ときの素朴で大らかな太陽神に戻って欲しい。

- 〔1〕『王権神話の二元構造』、溝口睦子著、吉川弘文館
- 〔2〕『ニギハヤヒ「先代旧事本紀」から探る物部氏の祖神』、戸矢学著、河出書房新社
- 〔3〕『ヒルコ 棄てられた謎の神』、戸矢学著、河出書房新社
- 〔4〕『ツクヨミ 秘された神』、戸矢学著、河出書房新社

## 執筆者紹介

### 中川 健治

電気電子情報工学専攻教授。専門領域は、待ち行列理論、ネットワーク特性評価、応用確率論。

---

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『アマテラスの誕生：古代王権の源流を探る』 溝口睦子 岩波書店 岩波新書 2009年 842円

『王権神話の二元構造』 溝口睦子著 吉川弘文館 2000年 品切

『ニギハヤヒ：『先代旧事本紀』から探る物部氏の祖神』 戸矢学著 河出書房新社 2011年 1,836円

『ヒルコ：棄てられた謎の神 増補新版』 戸矢学著 河出書房新社 2014年 1,836円

『ツクヨミ：秘された神』 戸矢学著 河出書房新社 2007年 1,836円

ブックガイド目次へ